

2017.5.23

会員の皆様こんにちは。オリンピック・パラリンピックの経済波及効果には期待が高まります。施設整備が進み、外国人観光客も増えるからです。反面、大会が終わった後、使われなくなった会場がお荷物になる例もあります。東京大会に関して会場整備や運営金の負担などまだまだ紆余曲折が予想されますが、国民のマインドセットについては前を向いて行きたいものです。今回のご寄稿に、オリンピック・パラリンピックを社会変革の契機とするという新しい視点が示されています。ご一読下さい。

石田まさひろ政策研究会

## 2020年を契機に「Open mind to all !」

### ■ 2020年東京大会で超高齢社会への変革を

1964年東京大会をリアルタイムで経験した多くの人は、日本社会全体が、底から湧き上がるエネルギーに押し上げられながら、目に見えて変わり、新しい時代が幕を開けたことを実感したという。約半世紀を経て、2020年に東京大会を迎える私たちは、大会を契機に何を実現し、その先の日本に何を残していくのだろうか。

2020年と2030年の日本を「人」で見ると、65歳以上の人が、2020年には3.2人に1

人、2030年には2.5人に1人になる。外国人観光客は、2015年で約2000万人だが、2020年には4000万人、2030年には6000万人を目指して観光戦略を推進している。人口の半分に相当する外国人観光客がやってくる規模感を想像してほしい。外国人観光客、高齢者や障害者をはじめ多彩な人々が集う2020年東京大会は、格好のきっかけであり、待ったなしの超高齢社会に向け社会を変革するラストチャンスといえる。



ウィルチェアーラグビー リオ2016パラリンピックにて銅メダル獲得！  
出典：JPC WEBサイト (<http://www.jsad.or.jp/paralympic/rio/info/gallery.html>)

## ■「ユニバーサルデザイン2020行動計画」

2017年2月20日、安倍総理大臣ご出席のもと、関係閣僚が集まり「ユニバーサルデザイン2020行動計画」がまとめられた。

ポイントは「障害の社会モデル」の普及のほか、主に下記の表1である。

## ■ 2020年東京大会の最大のレガシーは「心」の変革

日本社会には、外国人への言葉のバリア、障害者や高齢者への身体面（ハード面）のバリア、そして障害や異文化を含めた様々な「個性」への心のバリアが幾重にも見受けられる。

このままの状態では、超高齢社会を迎え、果た

して新しい時代を切り拓いていけるだろうか。バリアを取り払って、内にも外にも開かれた社会に変わったなら、見えてくる景色は変わってくるのではないだろうか。

成熟社会日本にとって、2020年東京大会の最大のレガシーは、「心」の変革において他にないだろう。ユニバーサルデザイン2020行動計画を受け、今後どんなムーブメントが仕掛けられていくか、そして、多くの人が巻き込まれ、それぞれがインフルエンサーとなってどんなうねりを生み出していけるか。2020年東京大会を同時代で迎える者として、熱い期待を込めてウォッチしていきたい。

ペンネーム EO

- ① 障害者に関する政策立案に際しては、その検討・評価に当事者が参画し、その視点を政策に反映させること
- ② 障害者が利用しやすい駅やホテル等を増やすための整備基準の改定
- ③ すべての子ども達に「心のバリアフリー」を指導するための学習指導要領の改訂
- ④ 接遇を行う業界（交通、観光、流通、外食等）における全国共通の接遇マニュアルの策定・普及
- ⑤ 障害を理解し、困っている障害者に自然に声かけができる国民文化醸成に向けた仕組みの創設

表1：ユニバーサルデザイン2020行動計画